

# 新しい史料学としての歴史情報論

菊地 大樹（大学院情報学環・准教授）

## はじめに

明治以来、何度か訪れた近代史学の大きな転換点の一つが、1975年前後にあると著者は考えている。戦後歴史学において主体的な地位を占めてきた唯物史観が大きく後退し、学界における議論が分散化していったのが、このころの研究史的状况であろう。このようななかで注目を浴びたのが、網野善彦に領導された、いわゆる「社会史」ブームに支えられた列島再考論

である。言説という意味でも分野を超えて多くの知識人に影響を与えたこの傾向は、しかし単なるブームではなかったのであり、歴史研究者の間にも大きな方法論的再考を促した。「実証主義」歴史学もまた、自己を支える史料の扱い方に対する根本的な検討を迫られたのである。その中で進められた試みが、歴史を「ひろげる」作業であった。

## 1. 史料を「ひろげる」

歴史を「ひろげる」とは、それまで史料とは認識されていなかった様々な対象を史料学の中へ引き込み、歴史研究の素材として活用することである。そもそも「史料学」と言っても、70年代までは研究分野として十分に認識されておらず、せいぜい古典的な古文書学がイメージされる程度だったことを考えれば、どのようなものが歴史研究を進めてゆくうえで、史料としてその視野に入ってくるのかを自覚すること自体が、歴史を「ひろげる」作業としてまず重要となってくる。

著者の専門の日本中世史に即して言えば、

『平家物語』や『古今著聞集』といった軍記や説話、あるいは和歌などの文学作品、紙背文書、荘園絵図や洛中洛外図などの絵図類、絵巻物（絵と詞書の双方）、起請文のような護符や聖教、地名や伝承、石造物や金石文、そして遺跡や遺物などの考古学的資料等々である。従来の個別分野における「たこつぼ型」の研究が批判され、歴史・民俗・考古・文学等の協同が最も声高に叫ばれて、学際的な研究に、多くの研究者が新たな段階へのステップアップを期待したのも、1990年代歴史学の大きな特徴であったと言えるだろう。

そこでまず触れたいのが、こうした史料学的な展開の中で見直されてきた古文書学である。はやく70年代前半には、古文書の要件を差出人と受取人の関係に見出し、機能論を軸として展開する方法が提唱されていた。パレオグラフィの翻訳でもなければ、筆跡や真偽鑑定などの直観的な「審美眼」を要請するものでもない、それまでの古文書学をおおきく「ひろげる」研究が開始されたのである。このような先駆的な研究の基盤に立って、史料を「ひろげる」作業の過程では、古文書そのものの読解を再検討することはもちろん、古文書をモノ史料としてとらえ直し、折り目や料紙といった新しい視点に即して分析してゆく方法も進められるようになっていく。

以上のような研究動向のなかで視野に入ってきたのが紙背文書（裏文書）である。これは、一般に紙が貴重品であった前近代社会におい

## 2. 中世宗教史と史料学

次に、著者が専攻する中世宗教史について述べると、聖教史料の調査の著しい進展を挙げることができる。従来、中世宗教の頂点は法然・親鸞・道元・日蓮などであると考えられ、彼らの残した著作に著しく研究の重点が置かれたが、やがて議論は閉塞的になっていった。しかし、70年代後半以降、じつは法然らの活動の背景としか考えられてこなかった東大寺・興福寺・延暦寺・園城寺・東寺・高野山などの研究が中世宗教史の全体像を知る上で極めて重要であると認識されるようになり、それまで研究の視野に入っていなかった寺院に残された大規模

で、自己のもとに届いた文書を、それが一次的役割を終えた後にも廃棄せず、紙の裏側を二次利用面として卷子や袋綴に加工して再利用して、典籍や写経などを行った結果、その裏（一次利用面）に副次的に残された古文書を指す。権利の保全等のために意識的に残され伝世した古文書と異なり、そこには中世人が後世に伝えようと意図しなかった別の世界が広がっているのである。

ちなみに、それまでいったんニセモノと鑑定されると史料としては見向きもされなかった偽文書にも、この時期に注目が集まるようになり、昨今では「偽文学書学」が提唱されるまでになった。すなわち、同時代におけるその作成契機を考察することは、あらたな課題の発見につながるものである。じつはこの分野でも主導的役割を果たした研究者のひとりに、網野を挙げることができるのである。

史料群に対する関心が高まった。

すでに、寺院に伝来した史料群の中で『東大寺文書』『東寺文書』などの古文書は早くから調査・活用が進んでいたが、それ以外の經典や教理書などの典籍、すなわち聖教史料はほとんど手付かずのままだったのである。もちろん、はやく大正時代に醍醐寺古文書聖教の調査が始められるなど、いくつかのパイロットケースはあるものの、大寺院の経蔵に膨大に残された經典や教理書、説草・論義草（説法や論義の際に作成された原稿）、儀式の次第書などの聖教史料の本格的調査が始まり、活用の方法が考えら

れるようになったのは、やはり80年代以降のことであろう。これらの聖教史料においては、いつ誰がどこで書写したのかを記す奥書の部分に注目が集まりがちで、その教理的内容についての歴史学的検討や方法論の開拓はいまだに十分に進んでいない。しかしそこには、インドに起源する漢訳經典に説かれたのとはおよそ異なる日本中世に固有のさまざまな言説が広がっており、その中からおびただしい儀礼の場が創出

### 3. 歴史情報論の課題

いままで、史料を「ひろげる」ということについて述べてきた。しかしながらそれは、単に新たな史料分野を「つげくわえる」という単純な発想であってはならず、そのことによって史料学さらには歴史研究に対して、根本的な方法的再検討を迫ってゆくようなものでなければならない。現代に生きるわれわれは、過去の時代からある部分を「きりとる」ことによって研究対象としての史料分野を獲得する。この意味で、史料学研究には常に盲点が生まれることが不可避である。それだからこそ、われわれは複合的な史料分野に視野を「ひろげる」作業を常に意識し続けることによって、現代人によって見失われてしまった歴史的コンテクストを明らかにする研究を目ざさなければならない。

最後に、著者が宗教史料の一つとして研究を続けている板碑を事例として、今後の見通しを述べておきたい。板碑とは、中世を通じて建立された供養塔であり、石を板状に成型して、その表面に本尊をあらわす種子（サンスクリット語起源の文字＝梵字）、種子を荘厳する天蓋や

されていたのである。これらの言説研究において、残念ながら歴史研究者は文学研究者におくれを取っていると言わねばならない。文学研究においては、『万葉集』『源氏物語』以下、従来正統的な位置を占めてきた作品研究に加え、これらの寺院聖教へと問題関心を「ひろげる」ことから、斬新な多くの研究が生まれつつあるのである。

蓮座、本尊を讃える偈頌（經典から引かれた韻文）、そして建立の趣旨を述べる願文や、建立した年月日が刻みつけられている。これは、関東地方だけで4万基以上が確認されており、文献史料の少ない地域の歴史を知る上で大きな手掛かりを与えてくれる。しかし、実際に板碑の分析にとりかかるのは容易ではない。なぜならば、板碑は先ほど述べたような種々の構成要素からなる複合的な史料であり、仏教学・美術史学・思想史・歴史学、さらには板碑そのものの材質や形状を分析する考古学的なアプローチや民俗儀礼との関係など、さまざまな



栃木県小山市民病院地内出土板碑  
（千々和到『板碑とその時代』より転載）

研究分野の方法に関心を持ち、親しんでおくことが求められるからである。もっともこのことを、必ずしも重荷に感じる必要はない。むしろ上述のような複合的な史料であればこそ、中世

を「ひろげる」うえで大きな可能性を秘めているのであり、また他分野の研究者の共通の問題関心や議論のプラットフォームとして板碑が機能してゆくことが期待できるのである。

## おわりに

では、このような歴史を「ひろげる」という作業や方法が、歴史情報論とどのようにかわってくるのか。

現在著者は、史料編纂所に残された、板碑を含む2000点以上の拓本のデータベース構築を進めている。これにより、板碑はさらに金石文一般の研究のなかに位置づけられるのであり、その分析はさらに高度化し、複合的になってゆ

かねばならない。すなわち歴史情報論とは、単に史料の所在情報や書誌情報をデータベース化して終わるものではない。そのことによって得られた歴史的な知識としての情報を集約して再構成し、史料を生んだ歴史社会の知識体系を復元する作業、すなわち「歴史知識学」こそが、歴史情報論の目指す方向であると言えるのである。



菊地 大樹 (きくち ひろき)

【生年月日】1968年9月8日生

【最終学歴】1994年東京大学大学院修士課程修了。博士（文学）。

【専門領域】日本中世史・仏教史

【著書・論文】

『中世仏教の原形と展開』吉川弘文館、2007年

『中世の寺院と都市・権力』（共編著）、2007年

『鎌倉仏教への道』講談社、2011年

【所属学会】史学会・歴史学研究会・日本史研究会・日本仏教総合研究学会